

ANDERSEN GROUP

第38回 アンデルセンのメルヘン大賞 受賞作品 一覧

2021年4月2日
(株)アンデルセン・パン生活文化研究所

【一般部門】

大賞

「ぎんのひまわり」	門倉 信(かどくら しん) ※筆名	広島
	[選考・作画] 高野 謙二(たかの けんじ)	

優秀賞

「おいらは赤いタイルだぜ」	大森 あるま(おおもり あるま) ※筆名	東京
	[選考・作画] 安藤 俊彦(あんどう としひこ)	
「白い丘のモミジ」	近藤 栄一(こんどう えいいち)	鳥取
	[選考・作画] つくし	
「ねこに大判焼き」	山本 裕子(やまもと ゆうこ)	茨城
	[選考・作画] さこ ももみ	

入賞

「水たま青ちゃんのぼうけん」	井尻 哲(いじり さとる)	広島
「バス停のバース」	こばやし りか ※筆名	京都
「ふしぎなおんぼろアパート」	大河 増駆(たいが ますく) ※筆名	滋賀
「かな子さんの森」	飛田 泉(ひだ いずみ)	愛知
「魔法の洋館」	山本 敏雄(やまもと としお)	大阪

【こども部門】

大賞

「おばあちゃんの金平糖」	関岡 ミラ(せきおか みら)	神奈川
	[選考・作画] 谷口 周郎(たにぐち しゅうろう)	

入賞

「ひつじのハーブティー」	梅田 妃那子(うめだ ひなこ)	広島
「なんでも体験できる日」	吉田 絢愛(よしだ あやめ)	大阪

ANDERSEN GROUP

【一般部門】

大賞

月の光に照らされて、自分らしく咲くひまわり。
『ぎんのひまわり』

作：門倉 信 選考と作画：高野 謙二

ストーリー

夏の昼間のひまわり畑はにぎやか。一面のひまわりが笑ったり歌ったり、楽しいおしゃべりをする。けれど一本だけお日様に背を向けて咲くひまわりが。明るすぎる日の光や仲間とのおしゃべりが苦手だった。夜、涙を流すひまわりに月が話しかける。白い月の光がひまわりを優しく照らす。毎夜、月と話をするひまわりは、やがて銀色になって輝く。

解説

コロナ感染症によって当たり前の日常が制限され、ふれあうことができなくなった今。私たちは立ち止まり、不安の中で一人ひとりが自己に向き合っています。本当に大切なことを模索し、守りたいものを再確認し、新しいライフスタイルを思考しています。社会やコミュニティーのなかでの協調性は人それぞれです。ありのままの自分を肯定し、互いに個性の違いを認め合う。さまざまな価値観に惑わされず、流行にとらわれずに自分らしく生きる。そのために、自分に合う環境を見出し、分かち合いや共感、助け合える人を捜すこと。心のより所となる居場所をつくること——。

この物語の主人公は昼間の環境になじめない、仲間とのコミュニケーションも苦手なひまわりです。夜、ひとりぼっちのひまわりに、月が優しく寄り添います。月と語らい月の光に照らされながら、自分らしく咲くひまわり。ラストシーン、昼間の見えない月に向いて、銀色になって咲いているひまわりの姿が心に残る作品です。

受賞者のプロフィールとコメント

門倉 信 [広島県]

「社会集団の中で生きづらさを感じている子どもたちに、自分らしくいられる場所、心地よく過ごせる場所がどこかにあるよ、自分の居場所はきっとあるよと伝えたかった。優しく手を差しのべるような作品を書けたら、というのがきっかけでした。読んだ人が少しでも楽しい気持ち、優しい気持ちになってくれたら、とてもうれしく思います。」

ANDERSEN GROUP

【こども部門】

大賞

みんなを幸せな気持ちにする、夜空からの贈り物。

『おばあちゃんの金平糖』

作：関岡 ミラ 選考と作画：谷口 周郎

ストーリー

こたろうのおばあちゃんの金平糖は、優しい甘さですごくおいしい。こたろうは毎年、夏に山の上のおばあちゃん家に行く。おばあちゃんは金平糖ができるところを見せてくれると言う。たくさんの星が輝く夜、ふたりは傘を持って山頂へ向かう。すると金平糖の雨が降ってくる。おばあちゃんの金平糖は、星のかけらだった。空からは金平糖が降り続く。

解説

誰もが知る素朴なお菓子“金平糖(コンペイトウ)”。変わらないその形と味わいは、懐かしい思い出とともに記憶にあります。

このお話は金平糖を“星のかけら”のイメージに膨らませています。主人公の子ども目線で書かれたストーリーは、ファンタジックなシーンへと展開します。おばあちゃんは金平糖屋を開いた理由を「みんなを幸せな気持ちにするため」と語ります。まさに人は甘くておいしいお菓子を口にした時、幸せな気持ちになります。

今年もセミが鳴く頃に、こたろう君はおばあちゃん家に行くんだろうな。そして夜空からの贈り物の金平糖で、幸せな気持ちになるんだろうな。読者にそんなお話の続きを思わせるような作品です。

受賞者プロフィールとコメント

関岡 ミラ [神奈川県]

「2年生の頃、メルヘン大賞に応募したことがあります。その作品のコピーが出てきて、読み返しているうちに、また、白い作文用紙の中に新しい世界を生み出したくなりました。この物語のテーマは「愛」です。家族の愛、金平糖を食べる人への愛です。私の大好きな甘い物を通して、人が持っている「愛」の素晴らしさを、読む人に感じていただけたらなと思います。」

ANDERSEN GROUP

【一般部門】 優秀賞

『おいらは赤いタイルだぜ』

作:大森 あるま 選考と作画:安藤 俊彦

ストーリー

風呂場に貼られる赤いタイル。職人が落として角が欠けて捨てられる。ゴミ箱から逃げ出したタイルは、炎天下の坂道を転がっていく。少女が拾って持ち帰るが、ゴミ箱へ捨てられる。その夜、ある考えが浮かんだ少女はタイルを拾い、町中に捨てられたタイルを集める。夏休み明け「ふぞろいのタイルが貼られた花瓶」を発表。タイルはひとときわ赤く輝く。

受賞者プロフィールとコメント

大森 あるま [東京都]

「環境問題をテーマに、欠けたタイルに感情移入してリアルに表現しました。不完全で完璧ではない人の心に寄り添うお話になりました。童話は空想や願いを自由に表現できます。地球という星は宇宙の中で稀有の存在。それを忘れないように、環境や資源や自然を題材に人の不完全さや思いやり、協力し合うことの素晴らしさを描くことができれば最高です。」

『白い丘のモミジ』

作:近藤 栄一 選考と作画:つくし

ストーリー

丘の上にある一本のモミジ。秋にはススキの白い穂とモミジの紅葉が美しい。動物たちや人々に親しまれている。ある日、風力発電の風車建設の計画が持ち上がる。心配する動物たちにモミジは「落葉したら町中のゴミを枝につけて」と言う。相談した動物たちは枝には美しいリースを飾り、木の周りに町中のゴミを置く。それを見た人々は言葉を失う。

受賞者プロフィールとコメント

近藤 栄一 [鳥取県]

「物事の良し悪しは単純なものではなく、よく考えてみる必要があるのではないか……それが持続可能な社会を実現するためのものでも。この作品にはそういう思いを込めています。動物や植物でも接した時に「気持ちを通じた」と思う瞬間があります。生きものを愛おしく思う感情“優しさや温かさ”をテーマに、これからも書いていきたいと思っています。」

ANDERSEN GROUP

『ねこに大判焼き』

作: 山本 裕子 選考と作画: さこ ももみ

ストーリー

大判焼きの店を切り盛りするりほこさん。店じまいの頃、マフラーをして財布をぶら下げた猫が現れ、大判焼きを注文する。猫は亡きおじいさんに頼まれ、元気のないおばあさんのために買いにきたと話す。事情を知ったりほこさんは、大判焼きを焼いて渡す。すると次々にお客がきて、全部売り切れる。数日後、猫を連れておばあさんが店にやってくる。

受賞者プロフィールとコ

山本 裕子 [茨城県]

「コロナ禍でのさまざまな事情で、孤独を抱える方もおられると思います。そんなさみしい状況を思いながら、この作品では、大判焼きを買いに来た猫を通して、人と人がつながる温かさを描いてみたいと考えました。子どもの頃から、お話を読むのも書くのも大好きでした。これからも、自分のライフワークとして童話を書き続けたいと思っています。」